

## 卷頭言



# 索引のない百科辞典

## 箭内 洪一郎

もう一昔も前のことと恐縮だが、昭

和四十七年四月一日、県北教育事務所管理主事を命じられた。管理主事の仕事は、今まで経験したことと密着した。また、その延長部分にあたる仕事であろうと漠然とした考へで着任したのであつたが、予想外の未知の分野に直面し、ただただ己れを失うのみであったことを思い出す。

その職務内容は、市町村の学校管理及び人事管理を骨とする、極めて小範

囲であるのだが、これらをめぐる事務手続きが、かくも複雑、多岐にわたるものとは、考へてもいなかつたのである。

毎日の電話による照会、質問の洪水中にもまいった。自信のない、か細い声でおろおろと答えていた己れが、全く哀れであつた。今様の表現をとれば、この時の症状をカルチャード・ショックというのである。

先輩管理主事に安易にものをたずねることが、いかに愚かな行為であるかを身にしみて思い知られたのも、このころである。

甘い考へを捨て、自らの手によつて調べ、覚えなければ進歩はないのだと言い聞かされた。己れの年輪を思うとき、なんとも情けない話である。

大体、新米管理主事が、ざらりと並んだロッカーの中から、一冊の関係帳簿をみつけ、一枚の先例書類を探しあるといふことは、極めて難しい作業である。

その年の年度末人事事務が始まつた。相当量の人事事務のほかに、相変わらず、細かな手抜きのできない管理事務が容赦なくまつわりつき、緊張と煩雜さに顔面がひきつり、血ののぼるのを覚えた。

場あたり的に資料を求め、そして整理し、その後やつと仕事にとりかかるのでは、いくら時間があつても足りるのはずがないのである。

二年目の夏、三人の同僚と一緒にかけて、過去五年間の市町村教委や学校へ出した回答行政事例を全て洗い出し項目を立て分類整理し、一冊の管理事務ハンドブックとした。嬉しかつた。また、急に自信が湧いてきて一人前の管理主事になつたような気分に浸つた。考えてみれば、その当時の一年間は資料の貯えもなく、その場あたりのやり方が、いたずらに仕事を忙しくさせ、顔面を紅潮させていたのである。行政事務執行上の創意工夫など、想像することすら、できなかつたのである。

分類、整理のない、雑多な資料をいくら数多く抱えこんでいようとも、所詮索引のない百科辞典と同様、全く価値の薄いものであるということを、この時ほど身にしみて思い知られたことはなかつた。

(やないこういちろう  
・義務教育課長)